

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 21 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21510271

研究課題名（和文） 海域東南アジアにおけるグローバル・アクターと周縁社会—開発過程の
国家間比較研究課題名（英文） Global Actor and Marginalized Society in Maritime Southeast Asia:
A Comparative Study on the Social Dynamics of Development Process

研究代表者

長津 一史（NAGATSU KAZUFUMI）

東洋大学・社会学部・准教授

研究者番号：20324676

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、島嶼部東南アジアの三ヵ国、フィリピン、マレーシア、インドネシアの周縁民族としてのサマ（バジャウ）人社会における開発過程のダイナミクスを比較検討することである。サマ人社会における開発は、1960年代から主に国家主導で進められてきたが、1990年代以降、開発がグローバルな関係性のもとで展開するようになると、三ヵ国いずれのサマ人も脱周縁化を明確に志向し、そのための社会運動を組織するようになった。本研究は、サマ人の開発過程にみるこうした社会現象の内容とその歴史的文脈を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research project aimed at comparatively exploring dynamics of the development processes among the Sama (Bajau) as a marginalized society in the Philippines, Malaysia and Indonesia since the 1960s. The development processes were closely related to the national policies. Meanwhile, the development projects have been arranged in highly globalized circumstances since the 1990s. In the latter process, the Sama became more conscious of their social status than previously, and begun to organize various social activities to de-marginalize themselves in all the three countries. We have depicted the cases of this social phenomenon and examined the local historical contexts.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：海域東南アジア、サマ人、開発過程、グローバル・アクター、国家間比較

1. 研究開始当初の背景

1960年代以降、島嶼部東南アジアの三カ国、フィリピン、マレーシア、インドネシアでは、国家主導の開発が地理的、社会的縁辺にまで浸透した。1990年代以降は、「民主化」や「地方自治」、「グローバル化」の流れのなかで、NGOなど民間セクターが主導する住民参加型や環境保護志向の開発援助・エンパワーメントが急速に展開されるようになってきている。こうした開発の過程で、開発の到達目標モデルから最も遠くに位置していた周縁社会は、特に急激な変容を経験した。

開発過程における周縁社会の変容は、経済領域のみに生じたわけではない。かつての国家主導の開発は、文化や宗教をはじめとする住民の心理、精神領域にも深く関与し、周縁社会のアイデンティティの基盤を揺るがしてきた。他方、1990年代以降の「民主化」、「地方自治」、「グローバル化」のもとでの開発もまた、住民参加や地方自治というときのその主体を必要とするがゆえに、人びとに自己表象の様式と輪郭を定め、それを身体化することを求めてきた。その過程で周縁社会の側も、民族や地域に関する歴史表象や、自然資源・土地に関する権利や慣習などを再発見し、あるいは新たに紡ぎだすようになっていく。

2. 研究の目的

本研究プロジェクトでは、上記のような開発をめぐる歴史過程を念頭に、主に1960年代以後の島嶼部東南アジアの三カ国における国家の開発機関や開発グローバル・アクターと、周縁社会としてのサマ人の相互作用のダイナミクスを、(1)「開発する側」の開発の言説や実践、(2)「開発される側」の経済・宗教生活の変容、(3)開発をめぐる両者の相互作用・反作用の分析を通じて実証的に考察し、同時に各国のサマ人における広義の「開発過程」を比較検討することを目的とした。なお、ここでの周縁とは、国家の地理的縁辺のみならず、行政、制度、文化、民族などが日常的に拮抗・交錯しあう、複数の社会的次元で「はざま」になっている空間と定義したい。周縁社会とは、そうした空間文脈に生成した、あるいはつくられたマイノリティないし周縁側の社会を指している。

最終的に本研究は、先に述べた三点に関する考察を通して、国家主導の開発を基点とする約半世紀の開発の過程で、各国のサマ人の周縁性がいかに解消されてきたのか、または再生産されてきたのか、つまり開発過程におけるサマ人の脱周縁化/再周縁化の構図を、国家間での異同をふまえて提示することを

試みた。

3. 研究の方法

本研究では、周縁社会としてのサマ人社会と、地方政府、宗教団体、環境NGO等が媒介してきた開発との動的な関わりを、フィールドワークと現地での資料調査に基づき、また国家間比較の視点を取り入れて考察した。



図：主要な調査地

主要な調査地は、研究メンバーがこれまで定点調査を実施してきた3地域、つまりフィリピン・ミンダナオ島南東のダバオ (Davao)、マレーシア・サバ州の南東岸のセンボルナ (Semporna)、およびインドネシアの東ジャワ州スムヌブ県カンゲアン諸島のサブカン (Sapekan) 島それぞれのサマ人集落である(図参照)。インドネシアについては、スラウェシ島沿岸の複数のサマ人集落において比較調査も実施した。開発アクターとしては、次のような団体・組織に着目した。

- ・フィリピン：ペンテコステ派キリスト教団体 (Pentecostals)
- ・インドネシア：イスラーム統一協会 (PERSIS)、世界自然保護基金 (WWF)
- ・マレーシア：州地方政府、観光局

これらに加えて、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約」(CITES) や、他の海産資源利用に関する国際条約のサマ人社会への影響も考察の対象に含めた。

4. 研究成果

◇ フィリピンのサマ人社会における開発過程

本研究では、開発援助の現場における「解釈コミュニティ」が「遍在的個人性」によって出現するという議論を念頭において、それが実際にどのように展開されるのかを、フィリピン・ミンダナオ島南東のダバオ市のバジャウと自称する／他称されるサマ語系の人びとが暮らす集落を事例に検討した。「解釈コミュニティ」とは、開発援助プロジェクトにおいて政策と実践はなぜ乖離するのかという問題に対して、人類学のMosseが提示した概念である（Mosse, David 2005, *Cultivating Development: An Ethnography of Aid Policy and Practice*, London: Pluto Press）。また、「普遍的個人性」とは、人類学・社会人間学の松田が示した概念で、歴史的・文化的文脈において共同体と相互作用しながら制限された範囲とはいえ選択と創造の行為を行う個人性のこと（松田素二 2009『日常人類学宣言！——生活世界の深層へ／から』京都：世界思想社）。これらの概念を援用し、本研究ではドナーであるペンテコステ派キリスト教系団体が掲げる合理的援助理念が、開発の現場——ダバオの周縁社会としてのサマ人社会——ではなぜ歪められるのかを考察した。

調査の意義は、第一に、「人間観」の差異を再検討しながら、政策科学と「地域研究」のより豊かな結びつきを考えるための材料を提供すること。第二に、グローバル・アクターである開発援助主体が、グローバル・イシューとしての「貧困」の現場として調査地に介入し、「貧困者」としてのサマ・バジャウと相互作用する事例を示すこと。第三に、従来の開発援助研究では開発の担い手として看過されてきたキリスト教宣教団体も開発援助主体（宗教的・精神的ニーズにも応答する）とみなし分析に加えたこと。第四に、フィリピンの地方都市で日々の困難に対処する過程で生活を再編成している、「海の民」とは異なるようなサマ・バジャウの存在を実証的に描くこと、である。

具体的には、主に生業と経済生活に関する一次資料の収集と分析を通じて、次の三つの課題を検討した。1) 住民の経済生活が客観的指標でみて変化に乏しいことから、政策（「援助の公式・表向きの目的」を指す）と援助介入の結果の乖離を示すこと。2) 投入された物資・サービスの内容を検証し、政策と援助介入の結果が乖離していたにも関わらず援助が継続した理由を探ること。3) 開発援助主体とミドルマン（サマ・バジャウ牧

師、セブアノ系 NGO 関係者）との間の隠された交換関係をそれが遍在的個人性の発揮の下で行われた状況と併せて記述分析し、上記した解釈コミュニティの出現を指摘すること。（青山）

◇ マレーシアのサマ人社会における開発過程

本研究では、マレーシアのサバ州南東岸の国境地帯に位置するセンボルナに居住するサマ人を対象とし、この地域の地方政府や政党組織を主体とする開発の政治過程、およびその過程における自己表象の生成と再編のダイナミクスについて検討した。サマ人は、マレーシア、フィリピン、インドネシアのいずれの国家においても政治的、社会的、文化的な面で周縁的な位相におかれてきた。本研究の目的は、このようにトランスナショナルな生活圏を生きてきたマイノリティにおいて、国家を準拠とする自己・他者表象がいかにかに立ち現われ、また再編成されてきたのか、そうした表象に基づく集団認識が徹視的な社会関係をいかに変質させてきたのかを、1970年代以降のマレーシアにおける開発の文脈をふまえて考察することであった。

マレーシアの開発政策の特徴は、その理念と実際において民族カテゴリーを前景化し、それにしたがった非対称的な資源配分を前提としてきたことにある。1971年に始まる新経済政策（NEP）の主目的のひとつは、ブミプトラ（土地の子）と範疇化された在地民族、実質的にはマレー人の、主に華人に対する経済面での劣位性を解消することであった。同政策は1990年に終了するが、後継の開発政策においてもその根幹部分は連続している。

サバ州のサマ人は、バジャウという民族名のもと、同州のブミプトラを構成する主要な「原住民」であることが公に認められている。かれらはまた、マレーシアの公的宗教であるイスラームを信仰するムスリムである。こうした民族的定位にあるサマ人は、新経済政策の恩恵を全面的に享受してきた。ただし恩恵を享受することができたのは、主に国籍を持つ「先住のサマ」に限られた。そのため開発の過程では、まず「先住のサマ」と、国籍を持たない、または移住後に国籍を取得した「移民のサマ」の社会経済格差が拡大した。さらに二つの範疇は、異なる社会集団の範疇としてかれらのあいだで本質化され、定着していった。

他方、1990年代末からかれらのあいだでは、二つの範疇のサマ人を「バジャウ・ラウト」という新たな名乗りによって統合し、その範疇に含まれる人びとの「特別なブミプトラ」としての地位を地方政府に認めさせようとする試みが——非組織的にはあるが——進められてもいる。それは、観光産業等を通

じて、グローバルな関係性のもとに紡がれるようになった文化復興と、複数国家による地域間開発協力を背景に進められた国境管理の強化という、相反するベクトルのグローバル化の潮流と密接にかかわって生じた、自己定位のための新たな実践である。

本研究では、第一に開発をめぐる政治過程とそこでの語りに着目して、1990年代までのサマ人の自己表象の生成と再編をまとめた。第二に、1990年代末以降に展開したアイデンティティ再構築の試みについて、その系譜と文脈を示し、あわせてサマ人にとってのその試みの意味を探った。(長津)

◇ インドネシアのサマ人社会における開発過程

本研究では、東ジャワ州マドゥラ島東方沖のサブカン島のサマ人を対象に、イスラーム統一協会(PERSIS)の宗教復興運動と宗教実践の変容を検討した。スハルト体制期(1968-98年)にサマ人らインドネシアの周縁的住民は、「孤立した民族(suku terasing)」政策などを通じて、定住化やイスラーム化など、様々な社会的、文化的変容を経験した。その政策は周縁民族を国民に統合しようとする開発の政治過程の一環でもあった。

こうした中央集権的な開発のあり方は、1998年のスハルト政権崩壊とともに終焉した。スハルト政権の崩壊後、サブカン島のサマ人のあいだでは、民間イスラーム団体や在地の環境NGOらが主導する、「下からの開発」が盛んに実践されるようになっていく。そうした開発の主要な担い手のひとつが、東ジャワ州を中心にイスラーム復興運動を行ってきたPERSISである。PERSISは活動の重点を教育におき、初等レベルから大学レベルまでのイスラーム学校を各地で運営している。学生はその教育を原則、無償で受けることができる。そのかわりに、高等課程の学生は、卒業後、ダーイ(da'i)と呼ばれる「宗教開発実践」に数年間、従事することが義務づけられている。

サブカン島でPERSISの活動が盛んになるのは1990年代からである。その契機は、同島のPERSISの学校の卒業生が、パキスタンやエジプトなど、海外のイスラーム大学での留学を終え、同島でイスラーム実践の指導的地位につくようになったことであった。スハルト体制の崩壊は、同島のPERSISの国内・海外ネットワークを拡大させ、そのネットワークを通じた宗教復興運動を活性化させることになった。

本研究では、1)こうしたPERSIS指導層を主体とするイスラーム復興の歴史過程を、経済的基盤の変遷や、ダーイ「宗教開発実践」の在地・国際ネットワークの展開等に注目して検討した。また、2)PERSISの発展を含む

長期的な「イスラーム化」ともなうサマ人アイデンティティの再編過程についても考察した。第二点に関して興味深かったのは、サブカン島における「イスラーム化」が、民族性を排除することなく展開してきたことである。ここではイスラーム主義の浸透は、同時にサマ人意識の再認識ないし覚醒をも促してきた。この傾向は、マレーシアのサバ州において、国家に管理されたイスラーム主義の浸透が、サマ人意識を希薄化させていたことと対照的であった。本研究で得られたこうした知見は、海域東南アジア三カ国のサマ人社会における精神・文化面での「開発過程」を比較検討するための、具体的な手がかりをもたらすものであった。(長津)

◇ 海産資源利用に関する国際条約のサマ人社会への影響

1975年に発効した、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約」(CITES)と、同条約に基づく漁業の管理枠組みは、現在では、サマ人の経済生活、特にナマコやフカヒレ等の海産資源利用のあり方と様々な面で関係するようになっていく。本研究では、(a)CITESの附属書IもしくはIIに掲載された種(18科23属96種)の生態学的・地域文化的特徴、(b)それらの管理をおしすすめる背景にあるエコ・ポリティクスとそこでの言説について、東南アジア各国の国際環境NGO等におけるフィールド調査や資料調査に基づいて検討した。

2002年に開催されたCoP12以降、CITESの附属書I・IIには、海産種を中心とする59種が掲載されるようになった。また、2002年以降に記載された魚類は、生息・分布域も広汎におよび、その消費は生息域内ではなく、むしろ中国等のアジア市場を中心とした国外市場である。この意味において、国際貿易の規制によって野生生物の保護をおこなおうとするCITESが管理すべき魚種だともいえる。

しかし、問題は、こうした魚類は、サマ人をはじめとする東南アジアの住民の「伝統的商品」であったということである。サマ人の主要な漁獲対象であるナマコやサメも、2002年以降、同条約で管理手法についての議論が継続されている。こうした水産動物のおおくは、サンゴ礁に生息しており、サンゴ礁空間の全体を保護区として確立させようとの意見も少なくない。インドネシアのスラウェシ島のワカトビ(Wakatobi)県やフロレス島西端のコモド(Komodo)島周辺では、世界自然保護基金(WWF)をはじめとする国際的環境NGOが、地方政府との協力体制のもと、実際にサンゴ礁域での海産資源利用制限(ゾーニング)をおこなっている。以上のような海産資源管理を志向するCITESおよび環境NGOの

活動は、サマ人の漁業活動に大きな影響を及ぼすと思われる、今後も注視していく必要がある。(赤嶺)

◇ まとめ

サマ人社会における開発過程は、いうまでもなく国家レベルの政策や国家を準拠枠とする社会文化的文脈と密接に関係しながら展開してきた。その開発政策においてサマ人は、多くの場合、国民に統合ないし同化されるべき周縁的存在として位置づけられ、国家の主流派の文化的、経済的生活様式を受容することを求められ、その政策的要請に受動的にに応じてきた。他方、1990年代以降、開発がグローバルな関係性のもとで展開するようになると、三カ国いずれのサマ人もその関わりのなかで自らの社会的位相を認識し、脱周縁化のために様々な社会運動を組織するようになった。本研究プロジェクトでは、「開発する側」である国家やグローバル・アクターと、「開発される側」であるサマ人とのこうした相互作用の歴史過程を、上記したような具体的事例の記述を通じて跡づけ、また対象三カ国におけるその歴史過程の異同を提示してきた。

本研究の今後の課題としては、1) サマ人の事例をふまえて、上記三カ国における開発過程の社会的意味の特徴およびその共通性を、より広がりを持つ周縁社会の立場から捉えなおし、そのうえで島嶼部東南アジアの開発の歴史過程全体を再検討する作業が残されているといえよう。

これまでに述べた研究成果の多くは、下記の掲載業績で公表されている(予備的な報告を含む)。本研究組織全体にかかるものとしては、2011年6月の東南アジア学会春季大会において長津がパネル「島嶼部東南アジアの開発過程と境域——アイデンティティの再構築をめぐる」を組織した。2010年には、長津が主編者になり、『開発の社会史——東南アジアにみるジェンダー・マイノリティ・境域の動態』を刊行した。2010年発行の『白山人類学』13号では、長津が<特集> “Reconsidering Social History of Maritime Worlds in Southeast Asia: Perspectives from the Sama-Bajau” を編集した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計10件)

- ① 長津一史、「海民」の生成過程——インドネシア・スラウェシ周辺海域のサマ人を事例として、白山人類学、15号、2012、45-71、査読有。
- ② Nagatsu Kazufumi, Preliminary Spatial Data on the Distribution of the Sama-Bajau Population in Insular Southeast Asia, *Hakusan Review of Anthropology*, 13, 2010, 53-62, 査読無。
- ③ 松田裕之・赤嶺淳「野生生物資源管理と生物多様性の保全」『環境と公害』40巻1号、5-9、2010、査読有。
- ④ Aoyama Waka, Neighbors to the ‘Poor’ Bajau: An Oral Story of a Woman of the Cebuano Speaking Group in Davao City, the Philippines, *Hakusan Review of Anthropology*, 13, 2010, 3-33, 査読有。
- ⑤ 青山和佳「開発援助の現場における解釈コミュニティの出現——フィリピン・ダバオ市のバジャウ集落を事例に」『アジア研究』55巻4号、55-75、2009、査読有。

[学会発表] (計16件)

- ① Nagatsu, Kazufumi, Genealogy of the Maritime Creole and its Socio-ecological Settings in Wallacea, “Asian CORE Program Seminar: Interface, Negotiation, and Interaction in Southeast Asia,” Taipei: Academia Sinica, 28 February, 2012.
- ② 長津一史、「マレーシア・サバ州の跨境社会における開発の政治過程——サマ人の自己表象に着目して」、東南アジア学会第85回研究大会、2011年6月12日、札幌：北海道大学高等教育推進機構。
- ③ 青山和佳、「開発援助の現場におけるサマのアイデンティティ再構築——フィリピン・ダバオ市の事例から」、東南アジア学会第85回研究大会、2011年6月12日、札幌：北海道大学高等教育推進機構。
- ④ Nagatsu Kazufumi, On Maritime Frontier: A Socio-Ecological Setting and Identity of the Sea Folks in Wallacea, “The 7th Kyoto University Southeast Asia Forum: Politics, Livelihood and Local Praxis in the Era of Decentralization in Indonesia,” 8 January, 2011, Makassar, Indonesia: Hasanuddin University.
- ⑥ 松田裕之・赤嶺淳、野生生物資源管理と生物多様性の保全、日本哺乳類学会、2010年9月19日、岐阜：岐阜大学講堂。
- ⑤ 青山和佳、支援を見る眼、東南アジア学会第83回研究大会、2010年6月6日、豊橋：愛知大学豊橋校舎5号館。
- ⑦ Akamine Jun, Sea cucumber markets in the

worlds: Hong Kong, Guangzhou and New York, "ACIAR-SPC Asia-Pacific Tropical Sea Cucumber Aquaculture Symposium," 17 February, 2010, SPC: Noumea, New Caledonia.

- ⑧ Nagatsu Kazufumi, Introduction: Significance and Perspectives of the Studies on Maritime Folks in Southeast Asia, "The 3rd Annual Forum of Hakusan Anthropological Society: *Reconsidering Social History of Maritime Folks in Southeast Asia: From the Sama-Bajau Perspectives*," 10 February, 2010, Tokyo: Toyo University.

[図書] (計 10 件)

- ① 赤嶺淳、食文化継承の不可視性-稀少価値化時代の鯨食文化の動態、岸上伸啓 (編) 『捕鯨の文化人類学』、成山堂、2012、207-224。
② 長津一史・加藤剛 (編著)、『開発の社会史——東南アジアにみるジェンダー・マイノリティ・境域の動態』、風響社、2010、540。
③ 赤嶺淳、『ナマコを歩く——現場から考える生物多様性と文化多様性』、新泉社、2010、392。
④ 青山和佳・受田宏之・小林誉明 (編著) 『開発援助がつくる社会生活——現場からのプロジェクト診断』、大学教育出版、2010、228。
⑤ 長津一史、島嶼部東南アジアの海民——移動と海域生活圏の系譜、春山成子・藤巻正巳・野間晴雄 (編) 『朝倉世界地理講座 3 東南アジア』、朝倉書店、2009、250-259。

[その他]

ホームページ等

<http://www.balat.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長津 一史 (NAGATSU KAZUFUMI)
東洋大学・社会学部・准教授
研究者番号：20324676

(2) 研究分担者

赤嶺 淳 (AKAMINE JUN)
名古屋市立大学・人文社会学部・准教授
研究者番号：90336701

(3) 連携研究者

青山 和佳 (AOYAMA WAKA)
北海道大学大学院・メディアコミュニケー

ション研究院・准教授
研究者番号：90334218